

## 論文

## 保育者の経験年数が保育の行動や意識に与える影響 —保育の質向上に向けた取り組みの検討—

○田中浩二\*1 梅木幹司\*1 廣瀬春次\*1 水津玉美\*2

キーワード：保育者の行動・意識、保育の質、経験年数

### 1 はじめに

OECD（経済協力開発機構）は、カリキュラムの一貫性や継続的な幼保小接続の取り組みがその後の学力や社会的成長と関連していることや、社会的スキル（非認知スキル）の重要性について言及している。日本国内においても、就学前教育・保育での非認知スキルの獲得が、他の非認知スキルへの発展や小学校教育以降での認知スキル獲得などに影響を及ぼすという研究結果の公表や、平成30（2018）年の保育指針改訂で新たに導入された「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の実践への活用、0歳から18歳までを見通した学びの連続性と質の確保を目指した「幼保小の架け橋プログラム」を含めた幼児教育スタートプランが策定されるなど、就学前教育・保育の質向上や保幼小連携への取り組みに対する機運が高まっている。このような非認知スキルの育成や育ちの連続性の確保など、エビデンスに基づいた保幼小連携の必要性が提唱されるようになったのは近年のことであるが、保幼小連携そのものは小一プロブレムが社会問題として認識されるようになった2000年初期から取り組みが進められてきた。その間、保育所児童保育要録の作成・送付の義務化や、全国各地でアプローチカリキュラム・スタートカリキュラムが策定されるなど、さまざまな取り組みが行われてきたが、実効的な連携にはなかなか至らない現実がある。そこでの課題としては、連携や接続に向けた取り組みを行うための十分な時間や場の確保の困難さや、策定したアプローチカリキュラム・スタートカリキュラムや交流活動の形骸化、「幼児期の終わりまでに

育ってほしい姿」が十分に機能しないなど連携・接続のための共通ツールの課題、さらには保育所や認定こども園、幼稚園と小学校それぞれの間での「育ち」や「学び」に対する意識や認識の乖離などがある。田中ら<sup>1)2)</sup>は、これらに対する課題として保育や保育に関連する行為を構造化し、具体的かつ効果的な計画・実践のあり方を検討することの必要性について言及している。

また、昨今メディア等で報じられる不適切保育に関する背景として、保育者不足や保育者不足に起因する保育者の多忙さ、余裕のなさなどが多く取り沙汰されるが、根底には、これらの要因を背景として保育の質に対して十分に向き合うことができない現状も伺える。上記のように、非認知スキルの育成や小学校との接続、さらには適切な保育など、今日の保育では数多くの役割が課せられていると同時に、その中で「質」も求められている。

そこで本研究では、保育の質向上を図る観点から、保育者の行動や意識を規定する要因を探り、質向上に向けた取り組み方法を検討することを目的とした。

### 2 方法

#### 1) 調査目的および調査対象、調査期間

本研究は、保育所や認定こども園で行われている保育の現状を把握することならびに、保育において育まれる育ちや学びの連続性を確保するための要因を検討することを目的に調査を実施した。

調査対象は、山口県下関市内の公私立保育所および

\*1 至誠館大学 現代社会学部

\*2 下関短期大学 保育学科

認定こども園に所属するすべての保育者とした。

調査期間は、2022年10月に実施した。

## 2) 調査内容

本調査は、保育指針・教育保育要領では子どもの年齢によって保育の内容が異なるため、乳児担当保育士・保育教諭用（以下、乳児担当保育者用）、1・2歳児担当保育士・保育教諭用（以下、1・2歳児担当保育者用）、3歳以上児担当保育士・保育教諭用（以下、3歳以上児担当保育者用）の3種類の調査票を用いた。

調査項目は、①基本情報、②回答者の保育に関する行動や意識について、③保育指針・教育保育要領の内容について、④保育の内容と遊び・生活との関連について、⑤幼児期の終わりまでに育ってほしい姿について、の5つの調査項目群で構成した。このうち、①基本情報と②回答者の保育に関する行動や意識について、⑤幼児期の終わりまでに育ってほしい姿、についてはいずれの調査票で共通の設問であり、③保育指針・教育保育要領の内容については④保育の内容と遊び・生活の関連については、保育指針・教育保育要領の内容に応じ、異なる設問とした。

なお、本研究における分析では、①基本情報と②回答者の保育に関する行動や意識について、を用いた。これらの調査内容の具体的な質問項目について、①基本情報では、性別や経験年数、子育て経験の有無、職位、勤務時間など10項目とした。②回答者の保育に関する行動や意識では、日常の保育の中での計画の立案や閲覧、他職員との連携、保育に関連する意識・認識など25項目を設定し、「まったく該当しない」から「該当する」までの4段階の選択肢から回答してもらった。

## 3) 分析方法

本研究における分析方法については、まず記述統計量の算出を行った。②の保育に関する行動や意識の25項目については、それぞれの項目を比較しやすいように、4段階の回答分布をもとに0から100で示される

Item Index を算出した。

続いて本研究の趣旨を鑑み、経験年数以外に保育者の行動や意識に影響を与える可能性がある要素を除外することを目的に、基本情報に含まれている「現在の担当児童」および「クラス内での役割」と経験年数との関連を確認した。その際、複数項目間での経験年数の比較になることから、一元配置の分散分析を用いるとともに、Bonferroni法による多重比較を行った。

さらに、経験年数によって保育者を2つの群に分け、保育者の行動・意識25項目それぞれに対して $\chi^2$ 検定を行った。その際、有意な差が確認された項目については、調整済み残差を算出し詳細な傾向を把握した。

なお、統計分析には、SPSS29.0を使用した。

## 4) 倫理的配慮

本調査にあたっては、至誠館大学倫理審査委員会の承認を得た。

## 3 結果

下関市内の公私立保育所・認定こども園52ヶ所に772件の調査票を配布した結果、754件（回収率97.7%）の回答を得た。調査票別では、乳児担当保育者用に回答した件数は135件（17.9%）、1・2歳児担当保育者用の回答件数は318件（42.2%）、3歳以上担当保育者用への回答件は301件（39.9%）であった。得られた回答の中で、基本情報に欠損値があった場合には回答者に確認し、その他の項目での欠損値は同一項目の平均値を充てた。その結果、分析対象は回収数と同じ754件となった。

### 1) 回答者の基本属性

得られた754件の回答者の性別や子育て経験、職位等の基本情報を表1に示した。性別は、「女性」が736件（97.6%）、「男性」が18件（2.4%）であった。子育て経験については、「あり」が401件（53.2%）、「なし」が353件（46.8%）とそれぞれ約半数となった。職位

は、それぞれ「園長」が12件(1.6%)、「主任保育士」が66件(8.8%)、「保育士」が657件(87.1%)、「その他」が19件(2.5%)であった。勤務形態では、「常勤」が452件(59.9%)、「非常勤」が302件(40.1%)であった。勤務時間については、「概ね8時間」が523件(69.4%)、「6-8時間未満」が173件(22.9%)となり、いわゆる常勤相当あるいは常勤に準ずる勤務時間で勤務している保育者が全体の9割以上となった。現在の担当については、「1歳児」および「2歳児」がそれぞれ143件(19.0%)と最も多かった。次いで「0歳児」

が137件(18.2%)、「3歳児」が101件(13.4%)となり、年齢の低いクラスを担当する保育者が多く、配置基準を反映する結果となった。クラスでの役割は、「クラスリーダー」が303件(40.2%)、「サブリーダー」が149件(19.8%)、「その他」が302件(40.1%)となった。

平均経験年数(表2)では、全体の平均経験年数は13.2年となり、担当年齢毎では、「その他(フリーなど)」が最も高い19.3年、次いで「0歳児」クラス担当の保育者が13.8年、「1歳児」クラス担当保育者が13.2年となり、年齢の低いクラスの平均経験年数が高い結果となった。また、「その他(フリー)」は、経験年数が最も高く、SD(標準偏差)も高い値を示したことから、比較的経験年数の多い保育者が対応している傾向が伺えた。

表1 回答者の基本属性

項目		件数	割合
性別	女性	736	97.6
	男性	18	2.4
子育て経験	あり	401	53.2
	なし	353	46.8
職位	園長・副園長	12	1.6
	主任保育士	66	8.8
	保育士	657	87.1
	その他	19	2.5
勤務形態	常勤	452	59.9
	非常勤	302	40.1
勤務時間	概ね8時間	523	69.4
	6-8時間未満	173	22.9
	4-6時間未満	47	6.2
	4時間未満	11	1.5
現在の担当	0歳児	137	18.2
	1歳児	143	19.0
	2歳児	143	19.0
	3歳児	101	13.4
	4歳児	75	9.9
	5歳児	83	11.0
	その他(フリーなど)	72	9.5
クラスでの役割	クラスリーダー	303	40.2
	サブリーダー	149	19.8
	その他	302	40.1

## 2) 保育に関する行動や意識について

調査項目群IIでは、「あなた自身の保育に関する行動や意識について」として、計画の立案や閲覧、保育や保育指針・教育保育要領に対する理解など25項目について質問した結果を表3に示した。

表3では、それぞれの設問に対する選択肢の度数および割合を示すとともに、設問に対するItem Indexを算出した。Item Indexは0から100の間を示し、ここではすべての回答者が「まったく該当しない」を選択した場合には「0」、すべての回答者が「とても該当する」を選択した場合には「100」を示す。つまり、Item Indexを確認することによって、該当する(しない)傾向を簡易的に把握することが可能になる。

表2 回答者の基本属性

担当年齢	件数 (%)	経験年数の平均値 (±SD)	経験年数の中央値
0歳児	137 (18.2)	13.8 (±10.7)	12
1歳児	143 (19.0)	13.2 (±10.7)	11
2歳児	143 (19.0)	11.2 (±9.0)	10
3歳児	101 (13.4)	11.8 (±8.9)	11
4歳児	75 (9.9)	13.0 (±9.9)	11
5歳児	83 (11.0)	12.2 (±9.5)	8
その他(フリーなど)	72 (9.5)	19.3 (±11.4)	20
合計	754 (100.0)	13.2 (±10.24)	11

表3 保育に関する行動や意識についての結果

n=754

項目	まったく 該当しない	あまり 該当しない	まあまあ 該当する	とても 該当する	Item Index
Q1: 全体的な計画立案	369(48.9)	112(14.9)	107(14.2)	166(22.0)	36.4
Q2: 長期的指導計画立案	293(38.9)	45(6.0)	97(12.9)	319(42.3)	52.9
Q3: 短期的始動計画立案	286(37.9)	63(8.4)	87(11.5)	318(42.2)	52.7
Q4: 保育要録・指導要録作成	379(50.3)	54(7.2)	98(13.0)	223(29.6)	40.6
Q5: 日常の保育・計画立案のために全体的な計画を見る	170(22.5)	132(17.5)	246(32.6)	206(27.3)	54.9
Q6: 日常の保育・計画立案のために他クラスの指導計画を見る	282(37.4)	248(32.9)	145(19.2)	79(10.5)	34.3
Q7: 日常の保育・計画立案のために他クラスの保育を見る	200(26.5)	231(30.6)	244(32.4)	79(10.5)	42.3
Q8: 日常の保育・計画立案のために過去の指導計画を見る	192(25.5)	122(16.2)	254(33.7)	186(24.7)	52.5
Q9: 日常の保育・計画立案のために過去の評価・反省を見る	146(19.4)	101(13.4)	323(42.8)	184(24.4)	57.4
Q10: 立案された計画の内容を上司・先輩などと相談・協議する	129(17.1)	134(17.8)	295(39.1)	196(26.0)	58.0
Q11: 子どもの育ちを見通した計画を立案できる	92(12.2)	132(17.5)	453(60.1)	77(10.2)	56.1
Q12: 保育指針に記載されている内容を意識して保育している	18(2.4)	167(22.1)	464(61.5)	105(13.9)	62.3
Q13: 遊びを通して学ぶことを意識して保育している	0(0.0)	12(1.6)	337(44.7)	405(53.7)	84.0
Q14: 生活を通して学ぶことを意識して保育している	0(0.0)	7(0.9)	298(39.5)	449(59.5)	86.2
Q15: 次年度に進級・進学することを意識して保育している	1(0.1)	25(3.3)	252(33.4)	476(63.1)	86.5
Q16: 日常保育の参考に長期的な指導計画を見る	87(11.5)	131(17.4)	310(41.1)	226(30.0)	63.2
Q17: 日常保育の参考に短期的な指導計画を見る	77(10.2)	128(17.0)	293(38.9)	256(34.0)	65.5
Q18: 保育指針について理解している	14(1.9)	147(19.5)	523(69.4)	70(9.3)	62.0
Q19: 育みたい資質・能力について理解している	10(1.3)	161(21.4)	500(66.3)	83(11.0)	62.3
Q20: 幼児期の終わりまでに育って欲しい姿について理解している	5(0.7)	98(13.0)	515(68.3)	136(18.0)	67.9
Q21: 生活科の科目について理解している	108(14.3)	377(50.0)	231(30.6)	38(5.0)	42.1
Q22: 子どもの成長発達について理解している	3(0.4)	33(4.4)	563(74.7)	155(20.6)	71.8
Q23: 担当クラスの子どもの育ちを理解している	0(0.0)	19(2.5)	493(65.4)	242(32.1)	76.5
Q24: 保育で用いる遊びの種類を十分に持っている	8(1.1)	254(33.7)	443(58.8)	49(6.5)	56.9
Q25: 他の保育士と十分なコミュニケーションがとれている	5(0.7)	75(9.9)	458(60.7)	216(28.6)	72.5

注 表中の数値は度数、カッコ内は各項目内での割合

25 の設問中、最も高い Item Index を示した項目は、Q.15「次年度に進級・進学することを意識して保育している」の 86.5 であり、次いで Q.14「生活を通して学ぶことを意識して保育している」の 86.2、Q.13「遊びを通して学ぶことを意識している」の 84.0 となった。多くの項目で Item Index が 50 を超えるものの、Q.1「全体的な計画立案」や Q.4「保育要録・指導要録作成」、Q.6「日常の保育・計画立案のために他クラスの指導計画を見る」などは Item Index が 50 以下となる項目も散見された。

### 3) 保育者の属性による経験年数の傾向

担当児童やクラス内での役割という保育に関連する保育者の属性に対する保育者の経験年数の違いを確認

した。表 4 では、担当児童に対する経験年数の違いを確認した一元配置分散分析の結果を示した。0 歳児担当から 5 歳児担当まではいずれもそれぞれの間で経験年数の違いは確認されなかった。一方、その他、つまりフリーなどについてはすべての担当年齢に対して有意な差が確認された。具体的には、すべての担当年齢に対してその他の方で経験年数が高い結果となった。

さらに、担当クラス内での経験年数の比較を表 5 に示した。クラスリーダーとサブリーダー、その他の三者間で比較した結果、いずれの組み合わせにおいても経験年数の有意な差は確認されなかった。

これらの結果から、担当年齢やクラス内での役割は保育者の経験年数とは関連がないことが確認された。



表 4 現在の担当年齢と経験年数の比較結果

比較対象		平均値の差	標準誤差	P-Value 注	95% 信頼区間	
現在の担当	vs 現在の担当				下限	上限
0歳児	1歳児	0.657	1.201	ns	-3.00	4.32
	2歳児	2.629	1.201	ns	-1.03	6.29
	3歳児	2.07	1.317	ns	-1.95	6.09
	4歳児	0.819	1.443	ns	-3.58	5.22
	5歳児	1.603	1.397	ns	-2.66	5.86
	その他	-5.473	1.462	0.00*	-9.93	-1.02
1歳児	0歳児	-0.657	1.201	ns	-4.32	3.00
	2歳児	1.972	1.188	ns	-1.65	5.59
	3歳児	1.412	1.305	ns	-2.57	5.39
	4歳児	0.161	1.432	ns	-4.20	4.53
	5歳児	0.946	1.386	ns	-3.28	5.17
	その他	-6.131	1.451	0.00*	-10.56	-1.71
2歳児	0歳児	-2.629	1.201	ns	-6.29	1.03
	1歳児	-1.972	1.188	ns	-5.59	1.65
	3歳児	-0.56	1.305	ns	-4.54	3.42
	4歳児	-1.811	1.432	ns	-6.18	2.55
	5歳児	-1.026	1.386	ns	-5.25	3.20
	その他	-8.103	1.451	0.00*	-12.53	-3.68
3歳児	0歳児	-2.07	1.317	ns	-6.09	1.95
	1歳児	-1.412	1.305	ns	-5.39	2.57
	2歳児	0.56	1.305	ns	-3.42	4.54
	4歳児	-1.251	1.531	ns	-5.92	3.42
	5歳児	-0.467	1.488	ns	-5.00	4.07
	その他	-7.543	1.549	0.00*	-12.27	-2.82
4歳児	0歳児	-0.819	1.443	ns	-5.22	3.58
	1歳児	-0.161	1.432	ns	-4.53	4.20
	2歳児	1.811	1.432	ns	-2.55	6.18
	3歳児	1.251	1.531	ns	-3.42	5.92
	5歳児	0.784	1.6	ns	-4.09	5.66
	その他	-6.292	1.657	0.00*	-11.34	-1.24
5歳児	0歳児	-1.603	1.397	ns	-5.86	2.66
	1歳児	-0.946	1.386	ns	-5.17	3.28
	2歳児	1.026	1.386	ns	-3.20	5.25
	3歳児	0.467	1.488	ns	-4.07	5.00
	4歳児	-0.784	1.6	ns	-5.66	4.09
	その他	-7.077	1.618	0.00*	-12.01	-2.15

注 一元配置分散分析, P-Value\*<0.05

表 5 クラスの役割による経験年数比較結果

比較対象		平均値の差	標準誤差	P-value 注	95% 信頼区間	
担当クラスでの役割	vs 担当クラスでの役割				下限	上限
クラスリーダー	サブリーダー	1.34	1.025	ns	-1.12	3.8
	その他	0.55	0.833	ns	-1.45	2.55
サブリーダー	クラスリーダー	-1.34	1.025	ns	-3.8	1.12
	その他	-0.79	1.025	ns	-3.25	1.67
その他	クラスリーダー	-0.55	0.833	ns	-2.55	1.45
	サブリーダー	0.79	1.025	ns	-1.67	3.25

注 一元配置分散分析, P-Value\*<0.05

#### 4) 経験年数による保育に関する行動や意識

調査項目群IIでの、「あなた自身の保育に関する行動や意識について」の25項目に関して、経験年数によってその傾向が異なるかを確認した。経験年数の違いによって $\chi^2$ 検定を行った結果を表6に示した。

経験年数11年未満と11年以上で、保育に関する行動や意識について差が確認された項目は、Q.2「長期的指導計画の立案」やQ.3「短期的指導計画の立案」、Q.6「日常の保育・計画立案のために他クラスの指導計画を見る」、Q.8「日常の保育・指導計画立案のために過去の指導計画を見る」など、11項目であった。

$\chi^2$ 検定で差が確認された11項目の各セルにおける調整済み残差を確認したところ、Q.25「他の保育士と十分なコミュニケーションがとれている」を除く10項目すべてにおいて、経験年数11年以上の保育者が保育に対して前向きあるいは好ましい意識である傾向を示した。

### 4 考察

#### 1) 対象者の特性について

本研究では、保育に関する行動や意識について、経験年数によって差異があるのかを確認するための分析を行った。保育者の行動や意識に及ぼす影響について、佐藤<sup>4)</sup>は経験年数が子ども理解の視点に影響を及ぼすことについて言及し、堀<sup>5)</sup>は多様性の受容について援助観による違いを検討している。また、斉藤ら<sup>6)</sup>は保育者適正について性格特性や子ども観との関連性について指摘している。このように保育者の保育に対する行動や意識の背景についてはいくつかの検討が行われているが、行動や意識については多様な背景が影響を及ぼしていると考えられることから、確固たる言及には至りづらい状況がある。その点において本研究では、一つの自治体における全数調によって得られた量的研究であるとともに、含まれる保育者の特性も多様であるため、職域に関するバイアスを除外できると考えられた。

#### 2) 保育者の経験年数について

本研究では、保育者の経験年数によって保育に関する行動や意識の相違を検討することを目的としている。その際、保育所等内での役割や立場も行動や意識に影響を及ぼす要因の一つとして考えられた。したがって、本分析では、現在の担当児童およびクラス内での役割と経験年数の関連を分析した。その結果、現在の担当については、フリーなどその他の役割以外では経験年数の違いが見られなかった。つまり、柔軟にクラスに関わるフリーの役割を担う保育者は経験年数が高いことが確認されたが、特定の年齢のクラスを担当する際には経験年数は関連していないことが明らかとなった。同様に、クラス内での役割についても経験年数の違いは確認されなかった。これらのことから、後の分析で行う保育者の行動や意識には、現在の担当児童や役割の影響は比較的少ないことが推察された。

#### 3) 保育に関する行動や意識について

保育に関する行動や意識について、本研究では特に保育実践に関連すると考えられる25項目を設定し質問を行った。結果については、項目内の特徴を0から100の間で示すItem Index化を行うことにより項目間での比較を容易にした。

設問1から11、16、17は、保育所等での計画の立案や閲覧、協議に関する内容である。これらの項目で比較的高いItem Indexを示した項目は、Q.10「立案された計画の内容を上司・先輩などと相談・協議する」の58.0やQ.9「日常の保育・計画立案のために過去の指導計画を見る」の57.4となった。一方、Q.1「全体的な計画立案」やQ.6「日常の保育・計画立案のために他クラスの指導計画を見る」はItem Indexが30.0台の低い値となった。クラス間の連携や保育・育ちの連続性を視野に置いた場合には、他クラスの指導計画を閲覧することには意義があると考えられ、他クラスの指導計画を閲覧していない背景や要因を検討することが大切であると考えられた。

表6 保育に関する行動や意識についての結果

n=754

項目	経験年数	まったく該当しない	あまり該当しない	まあまあ該当する	とても該当する	P-Value 注
Q1: 全体的な計画立案	11年未満	171 (47.1)	62 (17.1)	49 (13.5)	81 (22.3)	ns
	11年以上	198 (50.6)	50 (12.8)	58 (14.8)	85 (21.7)	
Q2: 長期的指導計画立案	11年未満	119 (32.8)	18 (5.0)	62 (17.1)	164 (45.2)	0.00*
	11年以上	174 (44.5)	27 (6.9)	35 (9.0)	155 (39.6)	
Q3: 短期的始動計画立案	11年未満	115 (31.7)	28 (7.7)	53 (14.6)	167 (46.0)	0.00*
	11年以上	171 (43.7)	35 (9.0)	34 (8.7)	151 (38.6)	
Q4: 保育要録・指導要録作成	11年未満	195 (53.7)	27 (7.4)	38 (10.5)	103 (28.4)	ns
	11年以上	184 (47.1)	27 (6.9)	60 (15.3)	120 (30.7)	
Q5: 日常の保育・計画立案のために全体的な計画を見る	11年未満	74 (20.4)	66 (18.2)	129 (35.5)	94 (25.9)	ns
	11年以上	96 (24.6)	66 (16.9)	117 (29.9)	112 (28.6)	
Q6: 日常の保育・計画立案のために他クラスの指導計画を見る	11年未満	137 (37.7)	117 (32.2)	81 (22.3)	28 (7.7)	0.03*
	11年以上	145 (37.1)	131 (33.5)	64 (16.4)	51 (13.0)	
Q7: 日常の保育・計画立案のために他クラスの保育を見る	11年未満	91 (25.1)	113 (31.1)	119 (32.8)	40 (11.0)	ns
	11年以上	109 (27.9)	118 (30.2)	125 (32.0)	39 (10.0)	
Q8: 日常の保育・計画立案のために過去の指導計画を見る	11年未満	84 (23.1)	47 (12.9)	120 (33.1)	112 (30.9)	0.00*
	11年以上	108 (27.6)	75 (19.2)	134 (34.3)	74 (18.9)	
Q9: 日常の保育・計画立案のために過去の評価・反省を見る	11年未満	56 (15.4)	40 (11.0)	159 (43.8)	108 (29.8)	0.00*
	11年以上	90 (23.0)	61 (15.6)	164 (41.9)	76 (19.4)	
Q10: 立案された計画の内容を上司・先輩などと相談・協議する	11年未満	60 (16.5)	57 (15.7)	131 (36.1)	115 (31.7)	0.01*
	11年以上	69 (17.6)	77 (19.7)	164 (41.9)	81 (20.7)	
Q11: 子どもの育ちを見通した計画を立案できる	11年未満	38 (10.5)	76 (20.9)	216 (59.5)	33 (9.1)	ns
	11年以上	54 (13.8)	56 (14.3)	237 (60.6)	44 (11.3)	
Q12: 保育指針に記載されている内容を意識して保育している	11年未満	10 (2.8)	81 (22.3)	220 (60.6)	52 (14.3)	ns
	11年以上	8 (2.0)	86 (22.0)	244 (62.4)	53 (13.6)	
Q13: 遊びを通して学ぶことを意識して保育している	11年未満	0 (0.0)	6 (1.7)	183 (50.4)	174 (47.9)	0.01*
	11年以上	0 (0.0)	6 (1.5)	154 (39.4)	231 (59.1)	
Q14: 生活を通して学ぶことを意識して保育している	11年未満	0 (0.0)	3 (0.8)	162 (44.6)	198 (54.5)	0.02*
	11年以上	0 (0.0)	4 (1.0)	136 (34.8)	251 (64.2)	
Q15: 次年度に進級・進学することを意識して保育している	11年未満	1 (0.3)	20 (5.5)	133 (36.6)	209 (57.6)	0.00*
	11年以上	0 (0.0)	5 (1.3)	119 (30.4)	267 (68.3)	
Q16: 日常保育の参考に長期的な指導計画を見る	11年未満	40 (11.0)	61 (16.8)	149 (41.0)	113 (31.1)	ns
	11年以上	47 (12.0)	70 (17.9)	161 (41.2)	113 (28.9)	
Q17: 日常保育の参考に短期的な指導計画を見る	11年未満	41 (11.3)	50 (13.8)	145 (39.9)	127 (35.0)	ns
	11年以上	36 (9.2)	78 (19.9)	148 (37.9)	129 (33.0)	
Q18: 保育指針について理解している	11年未満	9 (2.5)	76 (20.9)	240 (66.1)	38 (10.5)	ns
	11年以上	5 (1.3)	71 (18.2)	283 (72.4)	32 (8.2)	
Q19: 育みたい資質・能力について理解している	11年未満	6 (1.7)	85 (23.4)	234 (64.5)	38 (10.5)	ns
	11年以上	4 (1.0)	76 (19.4)	266 (68.0)	45 (11.5)	
Q20: 幼児期の終わりまでに育って欲しい姿について理解している	11年未満	4 (1.1)	49 (13.5)	240 (66.1)	70 (19.3)	ns
	11年以上	1 (0.3)	49 (12.5)	275 (70.3)	66 (16.9)	
Q21: 生活科の科目について理解している	11年未満	58 (16.0)	177 (48.8)	115 (31.7)	13 (3.6)	ns
	11年以上	50 (12.8)	200 (51.2)	116 (29.7)	25 (6.4)	
Q22: 子どもの成長発達について理解している	11年未満	3 (0.9)	25 (6.9)	278 (76.6)	57 (15.7)	0.00*
	11年以上	0 (0.0)	8 (2.0)	285 (72.9)	98 (25.1)	
Q23: 担当クラスの子どもの育ちを理解している	11年未満	0 (0.0)	11 (3.0)	247 (68.0)	105 (28.9)	ns
	11年以上	0 (0.0)	8 (2.0)	246 (62.9)	137 (35.0)	
Q24: 保育で用いる遊びの種類を十分に持っている	11年未満	4 (1.1)	157 (43.3)	179 (49.3)	23 (6.3)	0.00*
	11年以上	4 (1.0)	97 (24.8)	264 (67.5)	26 (6.6)	
Q25: 他の保育士と十分なコミュニケーションがとれている	11年未満	3 (0.8)	39 (10.7)	199 (54.8)	122 (33.6)	0.01*
	11年以上	2 (0.5)	36 (9.2)	259 (66.2)	94 (24.0)	

注:  $\chi^2$ 検定, P-Value\* < 0.05

注2: 網かけセルは調査済み残差において正の値で有意

Q.12 から 15 は、保育に対する意識に関連する内容である。Q.12「保育指針に記載されている内容を意識して保育している」が 62.3 と他項目に比べて若干低い Item Index を示したものの、Q.13 から 15 は 80.0 を超える高い Item Index を示した。特に、Q.13 と 14 の「遊びを通して学ぶ」や「生活を通して学ぶ」といった内容は保育の根底に通じる項目あり、高い項目を示したことは、遊びや生活に対する保育者の意識の高さを伺わせる結果といえる。

Q.18 から 25 は保育に関連する知識や技術に対する設問である。保育の中で子どもを育む観点となる保育指針や育みたい資質能力、幼児期の終わりまでに育って欲しい姿、の理解については Item Index が 60.0 台となった。また、小学校への接続期において関連する知識の一つである小学校での生活科科目についての理解は 42.1 と低い値となった。反面、担当している子どもや子どもの発達についての理解では Item Index が 70.0 以上となった。ただし、本分析で得られた結果は、比較する対象が存在しないため、項目間での相対的な比較は可能であるが、保育を展開する際にどの程度の Item Index が求められ、また妥当であるかなどは不明であるため、一概に Item Index の高低を評価することはできない。しかし、計画や記録の閲覧や、保育に関連する知識などについては、日常の保育を实践する上で必要かつ有益な知識や技術であることから、今以上に高い結果が求められると考えられた。

経験年数の違いによる分析では、25 項目中 11 項目で行動・意識に違いが確認された。違いが確認された項目のうち、Q.2「長期的指導計画の立案」や Q.3「短期的な指導計画立案」では主に経験年数の高い保育者がその役割を担っている傾向が示唆された。加えて、日常の保育実践や指導計画作成を行う際に効果的と考えられる行動、例えば、Q.6「日常の保育・計画立案のために他クラスの指導計画を見る」や Q.8「日常の保育・計画立案のために過去の指導計画を見る」、Q.9「日常の保育・計画立案のために過去の評価・反省を見る」

などにおいて、経験年数 11 年以上の保育者の方で行われていた。さらに、保育の根幹に関わる考え方である Q.13「遊びを通して学ぶことを意識して保育している」や Q.14「生活を通して学ぶことを意識して保育している」は、経験年数の区別なく高い Item Index を示し、全体として意識されている傾向が示唆されたが、経験年数で区分すると、経験年数 11 年以上の保育者の方がより意識の程度が高いことが確認された。また、同様に適切な保育を行うために求められる知識・技術に関連する Q.22「子供の成長発達について理解している」や Q.24「保育で用いる遊びの種類を十分に持っている」についても、経験年数が高い保育者の方でより修得されている傾向が示された。

これらのことから、経験年数が高い方が保育に関連する行動や意識が前向きかつ高くなっていることが明らかとなったが、経験を積み重ねるだけで上記のような行動や意識に変容するわけでないことは想像に難くない。当然のことであるが、経験を積み重ねていく中で、どのような経験を経たか、あるいは保育や子どもたちにどのように向き合ってきたかなどがより重要である。つまり、本分析の結果からは、経験年数の高い保育者で保育に関する行動や意識に対する好ましい傾向が示されているが、経験年数の少ない保育者でも特に有意差が確認された内容について意識的な行動や思考を行うことにより、効果的に経験の差を補うことが可能になる。その意味において、本研究の意義が見出されると考えられた。

#### 4) 本研究の課題

本研究の限界として、第一には、調査対象が一つの地方自治体であり、必ずしも全国の実態を反映しているとは言えないという点である。保育者の行動や意識が培われる背景には、保育者が生まれ育った地域性や養成校などの資格取得の経験、さらには就労してからの経験などさまざまな要素が関与していると考えられる。したがって、本結果は一地域の結果であることに



注意を要する。ただし、本調査で用いた保育者の行動や意識の項目は、原則として保育所保育指針に掲げられている内容を中心としているとともに、多数の保育現場で実践されている内容であり、一地域の結果ではあるものの全国の標準的な内容を踏まえている点については言及しておく。

第二に、本研究では、経験年数の違いによる保育者の行動や意識の違いについて検討したが、行動や意識の違いを及ぼす背景は多岐にわたる点である。先にも述べたとおり、行動や意識を形成する背景は多岐にわたる。したがって、行動や意識の差異の背景を経験年数だけに限定することはできないことから、今後、経験年数以外の背景についても吟味する必要がある。ただし、本研究では、一地域とはいえ全数調査での結果であることから、本分析によって示唆された傾向は十分信頼に値する結果であり、保育者の行動や意識の背景を検討していく際の有益な資料になりうると考えられた。加えて、本分析では、経験年数の区分のための基準として中央値を用いて2つの区分を行った。これは、調査によって得られた平均値と中央値の結果を考慮したためである。経験年数が保育者の行動や意識に影響を与えることについては、結果によって明示されたとおりであるが、一方、行動や意識に変化を及ぼす経験値は必ずしも二分されるとは考えづらい。今後、経験値の階層性にも考慮した行動や意識の変容を検討していくことが求められると考えられた。

## 5 おわりに

本研究では、経験年数が保育者の行動や意識に与える影響を分析することで、経験年数による保育に関連する行為や意識の差異の傾向を把握した。その結果、経験年数を積み重ねることで、指導計画の作成はもとより、指導計画の作成や保育実践において他のクラスの指導計画を閲覧したり、過去の計画を参考にするなど、種々の情報を参考にしていることが示唆された。また、保育実践の際にも生活や遊びという保育におけ

る重要な観点がより意識されていると同時に、先の見通しを持っている傾向が明らかとなった。知識や技術においても、子どもの理解や遊びの修得に関して経験年数の多い保育者の方が自信を持っている傾向が示された。これらのことから、経験を積み重ねる中では、知識や技術の修得はもちろん、先の指導計画の立案や幅広い視点で保育実践にあたることを意識的に行うことが重要であると考えられた。

## 付記

本研究は、2022年度から実施されている下関市保育連盟での調査研究で得られたデータを活用したものである。

### [引用文献]

- 1) 田中浩二, 馬場康宏 (2017) 「効果的な保小連携を促進するための方法に関する検討: 「安全」に関する保育士と小学校教職員の認識について」『東京成徳短期大学紀要』 51, 37-47
- 2) 田中浩二 ほか (2019) 「保育士による就学期を見据えた保育内容に対する意識に関する研究: 保育士の経験年数による意識の相違について」『東京成徳短期大学紀要』 52, 23-33
- 3) 田中浩二 ほか (2023) 「保護者の子育て支援に対する保育関連行為の有用性に関する検討: 保育者と保護者の意識の違いにおける分析から」『至誠館大学研究紀要』 10, 49-57
- 4) 佐藤有香 (2023) 「保育者の経験年数による「子ども観」の視点の違い」『日本家政学会誌』 74 (3), 148-155
- 5) 堀由里 (2023) 「多様性の受容や尊重を実現するための要員の検討-学生の援助観との関連から」『桜花学園大学保育学部研究紀要』 27, 105-109
- 6) 斉藤範子 石川須美子 (2023) 「保育者養成課程における学生の保育者適正に関する要因: 性格特性と

子ども観の視点から」『別府大学短期大学部紀要』  
42, 65-75

[参考文献]

- 1) 経済協力開発機構（2022）『OECD スターティングストロング白書-乳幼児の教育とケア（ECEC）制作形成の原点』明石書店
- 2) 経済協力開発機構（2019）『OECD 保育の質向上白書-人生の始まりこそ力強く:ECEC のツールボックス』明石書店
- 3) 国立教育政策研究所（2020）『幼児教育・保育の国際比較:OECD 国際幼児教育・保育従事者の調査 2018 報告書-質の高い幼児教育・保育に向けて』明石書店
- 4) 厚生労働省（2018）『保育所保育指針解説』フレーベル館
- 5) 文部科学省「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き（初版）」[https://www.mext.go.jp/content/20220405-mxt\\_youji-000021702\\_3.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20220405-mxt_youji-000021702_3.pdf)（アクセス日 2023.11.1）
- 6) 文部科学省「学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について～幼保小の協働による架け橋期の教育の充実～」[https://www.mext.go.jp/content/20220307-mxt\\_youji-1258019\\_03.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20220307-mxt_youji-1258019_03.pdf)（アクセス日 2023.11.1）

## **Effect of Experience of Caregivers on Childcare Behaviors and Attitude －Consideration of Initiatives to Improve the Quality of Childcare－**

Koji TANAKA Motoshi UMEKI Haruji HIROSE Tamami SUIZU

abstract : The purpose of this study was to examine the behaviors and attitudes of child care providers to improve the quality of child care. Based on the years of experience of the child care providers, differences in their behaviors and attitudes were analyzed. As a result, overall, childcare was practiced with appropriate behavior and high awareness. On top of that, differences by years of experience were also identified. Specifically, more experienced caregivers tended to have a wider range of perspectives in creating instructional plans and practicing childcare, as well as a higher awareness of the quality of childcare. Since these are not necessarily the only things that require years of experience, it was thought that conscious action would supplement experience and improve the quality of childcare.